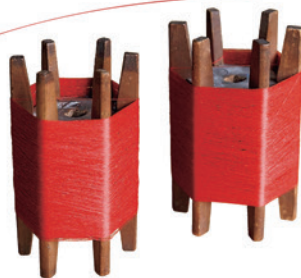




04 まとう

奥ゆかしさと煌びやかさ。
真紅の美しさは、人々を魅了する。

養蚕農家と町立蚕桑小学校の子ども達が生産した繭から糸を紡ぎ、染めと織りすべてをオール白鷹で作り上げた着物は町のシンボル。

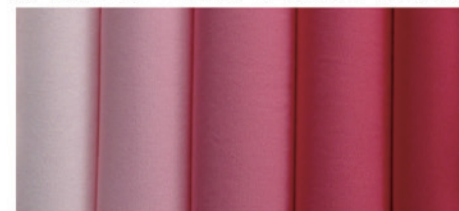


紅花染めと織物

1601(慶長6)年に米沢へ入部した上杉景勝の重臣直江兼統は、当時すでに栽培されていた紅花や漆・桑・青苧などを引き続き奨励し、藩の買上制としました。兼統が書いた『四季農戒書(しきのうかいしょ)』には、紅花を育てるうえでの農民の心得や農作業に対する注意事項なども細かく記されているそうです。米沢藩の紅花は、その多くは京都や大阪に送る商品作物でした。明治時代以降、化学染料が輸入され、紅花染は衰退の一途を辿ります。しかし、伝統的な紅花染を残そうと、昭和38年に株式会社新田(米沢市)が「紅花紬」を発表。米沢織が紅色に染まった瞬間でした。

紅花染めの色

【赤色素を使った色見本(画像提供: ㈱新田)】



薄紅色 一斤染 中紅 桃色 韓紅



紅花を使った染物としては、以下のようなものがあります。

- 赤色素を使った染物
 - 一斤染(いっこんぞめ):一反の生地を紅花600gで染めたもの
 - 韓紅(からくれない):一斤染を3回繰り返して重ねて染めたもの
- 黄色素を使った紅花染め
 - 黄染(きぞめ):紅花の黄色の染料で染めたもの
 - 朱華(はねず):黄染に韓紅を重ねて染めたもの
- 両方を使った染物
 - 濃紅(とぎくれない):黄染を3回、紅を8回重ねて染めたもの

紅花染めと織物

織物



米沢織は九代藩主・上杉鷹山公が、縮師を越後から呼び寄せて織り方を女性たちに習わせ、青学^{あおそ}を原料とする麻織物を奨励したことに始まります。その後、鷹山の藩政改革によって桑の栽培と養蚕が盛んになり、真綿を原料にした紬織物^{よねりゆう}は米琉紬、長井紬、白鷹紬と呼ばれるようになり、米沢織の草木染とともにのちに置賜紬に統一されます。そして、織物は麻織物から絹織物へ。やわらかな風合いの先染織物が確立し、江戸後期には全国に知られる一大絹織物産地となりました。明治に入ると化学染料による染色方法が普及し、米沢織もインドやアメリカに輸出されるように。明治以降、化学繊維が台頭し、人々のニーズも着物から洋服へと変わり、現在、米沢織は全体の60%が洋服地に使われています。こうして形を変えながらも職人たちの志や町の人々の努力で、米沢織物は連綿と続いていきます。

紅花染めと織物

紅花染めの工程

紅花染を取り入れた米沢織に力を入れている株式会社 新田で伝統的な紅染めの工程を教えてくださいました。



01

紅餅を一晩水につけ、水を変えながら黄色の液をもみ出して、黄色の色素を洗い流します。



02

黄汁を抜いた紅餅に、稲わらの灰汁水でつくった弱アルカリ水を入れて赤の色素を抽出します。



03

赤の色素に烏梅^{うばい}の液を入れて中和させ、弱酸性にしながら染めていきます。



04

赤の色を濃くするために烏梅^{うばい}の液を、状態を見ながら少しずつ加えていきます。



05

染めた糸は陰干しにして乾かします。

※烏梅^{うばい}：梅を燻製したもの ※灰汁水^{から}：薬灰に熱湯をかけて上澄みをすくったもの

女性を彩る紅

口紅

織物以外に口紅の材料にも用いられた紅餅。
紅をさす、当時の女性たちの姿に思いを馳せて。



「今様美人拾二景 てごわそう」・溪斎英泉 画 伊勢半本店 紅ミュージアム蔵

京都や大坂（大阪）などに運ばれた紅餅は「紅」の製造にも用いられ、江戸中期の風俗や習慣を記した当時の書物には、紅を使った化粧のことが登場します。様式美としてあった化粧が美しくみせる手段として、一般庶民に広まったのは江戸時代後期。この時代の化粧は、赤（紅）、白（白粉）、黒（眉墨・お歯黒）の3色のみ。唯一の有彩色である「紅」は女性の化粧には欠かせない色として、唇（口紅）、頬、目元、爪、耳たぶ、化粧下地等に用いられました。当時の「紅」は、紅花100%の紅餅から作られたもの。なかでも、玉虫色に輝く笹色紅は、絶世の美女「小野小町」にあやかって「小町紅」と名付けられました。美しい女性への憧れ、近づきたいという思いは昔も今も変わらないようです。

女性を彩る紅

小町紅の製造行程

日本で唯一、江戸時代から変わることなく伝統製法で紅を作り続ける株式会社伊勢半本店（東京都）に「小町紅」のつくり方を聞きました。



提供：国立国会図書館所蔵



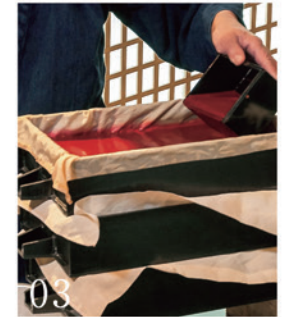
「山形における紅餅製造現場」・大正期(1912-1926)
画像提供：伊勢半本店



01 紅餅を水につけ、アルカリ溶液と酸液を加えてつくった紅液に麻の束（ゾク）を浸して赤く染めます。



02 染め上げたゾクを絞り、赤色色素を取り出します。



03 羽二重をかけたせいろに取り出した赤色色素を流し入れ、余分な水分を取り除きます。



04 羽二重の上に残った泥状の「紅」を集めます。



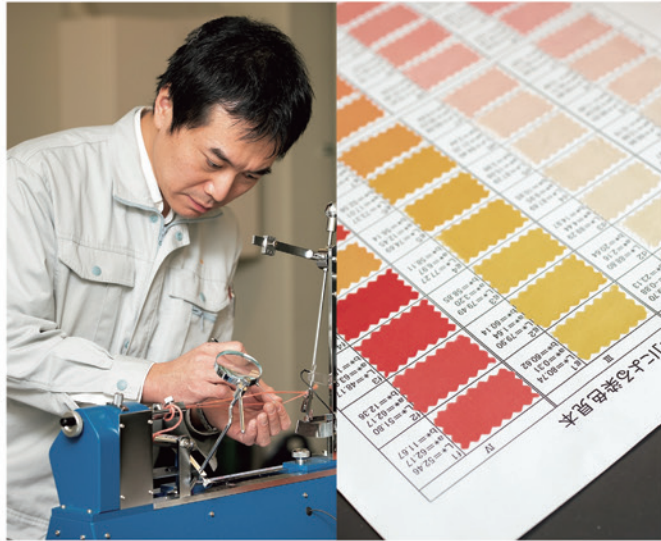
05 集めた紅を、刷毛で猪口などの内側にムラなく伸ばして自然乾燥させます。



06 塗りたてから玉虫色に変化するまでの様子。乾燥するに従い、次第に色が変わっていきます。

新たな技術報告

山形県工業技術センター



新技術で、ウールを50種以上の色に

一般的にウールを染める場合は高温で行いますが、紅花は温度が上がるとくすみが出たり、退色してしまうため、ウールやモヘア糸への濃染めは難しいとされていました。とはいえ、山形県は全国有数のニットの産地。紅花による染色は、産地をアピールするために必要とされるテーマでした。そこで、県工業技術センターでは、長年研究を行い「カチオン」を導入した化学処理によって、本来のウールの質を落とさずに低温でも鮮やかに染色する方法を見出したのです。また、新技術によって他の色素との組み合わせを可能にし、赤、黄、青の三原色による多彩な色を表現できるようになりました。銅や鉄など5種類の金属を染料と掛け合わせて色の定着を図るなど、山形の産業界に新たな可能性が広がります。

新たな技術報告



テーブルセンター

ウールを深紅に染められる技術は、山辺町のオリエンタルカーベット株式会社が製作したテーブルセンターにも応用されています。1kgの紅餅で染めることができる羊毛はテーブルセンター5枚分という貴重なもの（紅餅提供：山形県紅花生産組合連合会）。



セーター



先染めしたウールでセーターを製作。これまで糸の表面はウロコ状だったため、浸透しにくかった染料を改質処理によって改善。多色柄のセーターが実現しました（協力：峰田メリヤス株式会社）。



エジプトのミイラと紅花染め

4000年以上前、エジプトのミイラに巻き付けてあった布は紅花で染められていました。紅花で染めると腐敗防止と防虫効果があることも知られていた?!